12/4 マタイの福音書 1 章 1-17 節「キリストと呼ばれるイエスの誕生」

小池宏明牧師

マタイの福音書の一章の前半はカタカナ名が並び、多くの読者にとって退屈な箇所かも知れない。しかし、旧約聖書に親しんでいる人々にとっては、旧約のメシヤ預言と新約のメシヤ来臨の実現をつなぐ大切な箇所でもある。

＊アブラハムとダビデへの約束成就

主なる神様がアブラハムと結んだ契約（創世記 17 章 4-8 節）は、神の御子イエス・キリストが来られ、キリストを頭とする民が世界中に増え広がることによって確かに実現した。また、主なる神様がダビデと結んだ契約（サムエル記第二 7 章 12-16 節）は、ダビデの系図に連なる救い主イエス・キリストの王国が永遠に堅く立つことによって成就することを示している。主イエス様が復活の勝利を得たので、今も、今より先も、キリストを頭とする天の御国は、永遠に堅く立ち続けている。

＊罪深い人間の救済のために

マタイが記した系図は、旧約預言の成就を示しているだけではない。一般的に、ユダヤ人は男系系図を用いるが、あえてマリア以外にも四人の女性を登場させている。3 節「**ユダがタマルによって・・・**」。ユダとは、アブラハムの子孫、イサク、ヤコブ（イスラエル）と続き、その 12 人の息子の一人だ。いわゆる、イスラエル 12 部族のルーツに当たるユダが、カナン人の嫁で遊女の姿をしたタマルと関係をもってダビデ誕生へと繋がっている。5 節「**サルマがラハブによってボアズを生み、・・・**」。ラハブは、エリコの城壁の中に住んでいた遊女だが、イスラエルの偵察隊を助けることによって、エリコ陥落の時に救い出されて、イスラエルの民と共に行動するようになった。5 節の続き「**ボアズがルツによってオベデを生み、・・・**」。ルツもモアブ人で、イスラエルから見れば異邦人だが、ダビデ王の先祖になった。6 節後半「**・・・ダビデがウリヤの妻によってソロモンを生み、**」。ウリヤの妻とはバテ・シェバのこと。マタイは、あえて「ウリヤの妻」と記すことでダビデの不倫を明らかにしている。この系図の中で、民族の歴史の闇や弱さ、欠けなどを隠すことなく記していることは、主の憐れみと恵みの現われでもある。これは、イエス・キリストが、すべての罪・咎を引き受けて、身代わりの刑罰を受けて下さったことを表している。主なる神様は、全人類の救いのために、アブラハム以来、イスラエルの歴史を導き、ついには、救い主、イエス・キリストの許に行き着くように、ユダヤ人をはじめ、すべての国民を招いておられるのだ。